

平成 29 年 12 月 13 日

南の風 255

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

254号に書いた、『マンツーマンディフェンスの規程規則』に関する私の考えの続きです。

南の風249号に詳しく書いたのですが、反響が大きかったので再度書きます。

まず1についてです。引いてペイントの地域を守るゾーンは、ディフェンスの基本となる1対1のディフェンス能力、スキルを低下させます。よって15才以下では指導しないことを徹底することが必要です。現在、ペイントエリア付近で、地域を守るゾーンはほとんど行われていないと思います。

2については、プレスディフェンスは積極的に仕掛けて、相手に簡単にプレイさせない訳ですからどんな形態であろうと可とすべきです。5人が協力してボールをトラップしたり、パスカットを狙ったり、相手のエースにボールを持たせないようにしたりすることは、『状況判断能力を上げる』ことや、育成年代のバスケットボールIQを高めることに繋がるからです。「ゾーンプレスはどんなの?」という声もありますが、オールであれ、ハーフであれプレスしていることが明らかであれば問題ないと思います。

また仕掛けられた相手にすれば、どうボールを運ぶかというスキルアップにも繋がりますし、プレスを嫌がらずトラップにも慌てないというメンタル面を強化することにもなるわけですから。

こういった攻防の変化はバスケットボールの醍醐味であり、育成年代の選手にとっては欠くことのできない経験を積むことになるものと信じます。

さて、チャレンジカップ横浜予選の会場で話題になった続きです。マンツーマンディフェンスの考え方です。まずボールマンディフェンスについてです。

ある指導者の方が、「育成年代では、ノーミドルの考え方がいいのですか?」と聞いてこられました。傍にいた方々からいろいろな意見がでました。ある方は「ディレクションした方が片側を守ることに集中できるので、チームとして守り易いのでノーミドルは有効ではないか」述べました。別の方は「ノーミドルの場合、プレスだと再度ライン側にスペースはできないが、ノーマルなディスタンス（間合い）だとサイドライン側が空いてしまい、イージーショット（ミドル or ロング）を打たしてしまうことやアウトサイドスクリーンやドリブルスクリーンに掛かり易いのではないか」と言われました。

「正解」というのは勿論ないのですが、私は育成年代のボールマンディフェンスは、インラインをしっかり守るノーマルなマンツーマンを指導することが大切だと思います。なぜなら世界のオフェンスレベルはもの凄いスピードで進化しているからです。例えばボールマンがドリブルで1線を突破した場合、ヘルプが出てくればキックアウトして外にパスします。ディフェンスが対応すれば、さらにパス（エキストラパス）を回して打ちます。安易にヘルプ&ローテーションで対応すると、素早くパスを回されロングシュートを打たれてしまいます。そしてそのシュート確率も大変高くなっているのです。こうした世界レベルと伍していくためには、**1線（ボールマンディフェンス）の強化**をミニバス時代から取り組むことが喫緊の課題です。ハードルは高いのですが、ディフェンスの『読み・予測』『ステップ、フットワーク』の向上を目指さなければならないのです。簡単に抜かれることは、即得点につながってしまいます。次号では、ボールマンディフェンスの続きとオフボールマンディフェンスについて触れます。